

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第八主日 C 年

小西広志

2022 年 2 月 27 日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2022 年 2 月 27 日、年間第八主日となっています。今日の主日の三つの朗読箇所をシノドス的な観点から読んで味わってまいりましょう。

三つの比喩

第一朗読はシラ書 27 章から読まれています。朗読箇所には三つの比喩が登場します。「ふるい」(4 節)、「陶工の器」(5 節)、「樹木の手入れ」(6 節)です。朗読全体が伝えたいのは 7 節の最後の言葉です。フランシス

コ会訳が分かりやすいようです。「語らいこそ、人を試す試金石だから」(7 節 フランシスコ会訳)。人が語る言葉がその人そのものを表すというのです。伝えたい内容は実に単純です。誰でも分かっていることです。しかし、「ふるい」、「陶工の器」、そして「樹木の手入れ」と身近な事柄を使って比喩、つまり、たとえて語られると、じっくりと耳を傾けたくくなります。しかも、伝えたい内容が深くところに浸みるかのようです。たとえ話の効用はこんなところにあるのです。

苦労が無駄にならない

第二朗読では最後の一文に注目しましょう。「主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」(58 節)。キリスト信者として生きていくとは、復活された主イエス・キリストに強く結ばれて生きることです。起きているときも寝ているときも主イエス・キリストと結ばれて、主イエス・キリストのように生きることです。主は地上での生活をなさっているとき、苦労を重ねました。誰も主の言葉に耳を傾けませんでした。誰も主のなさる不思議なわざが分かりませんでした。そして、十字架を担うという苦労と十字架にかけられるという苦しみを体験なさいました。しかし、父なる神さまは、そんなイエスさまを死者の中から復活させてくださったのです。主イエス・キリストに結ばれて生きるとは、今の苦労や苦しみが決して無駄な骨折りに終わってしまわないという希望を抱いて生きることなのです。

心

福音朗読ですが、イエスさまはたとえ話を使ってお話しになっています。最後の45節にある「心」という言葉に注目しましょう。ここでは人間が語る言葉が生まれてくる根っ子のような意味で使われています。口から発せられる言葉はその人の内側を表しているのです。邪悪な人たちからは、よい言葉は生まれてこないのです。

まとめ

今日の福音朗読の箇所をフランシスコ会訳で読んでみると、「そしてまた、イエスは、彼らに一つの喩えを語られた」（ルカ6章39節）とあります。不思議な感じがします。なぜなら、今日の朗読箇所では盲人の道案内の喩え、丸太の喩え、善い木と悪い木の喩えと三つの喩えが続いているからです。それぞれの喩えをひとつにまとめてイエスさまはお話しになりたかったのでしょうか。

一つにまとめられた三つの喩えの結論は「人の口は、心からあふれ出ることを語る」（ルカ6章45節）となります。ですので、第一朗読との関連から今日のミサのテーマを考えてみますと、「語る言葉」となるでしょう。

その観点から、今一度、福音を読み返してみると、盲人の道案内では「穴に落ち込みはしないか」（39節）と行為に焦点が当たっているのに対して、続いての丸太の喩えでは「自分の目にある丸太を見ないで」（42節）と人のこころのうちといいたいまいしょうか、内面に関心を向けています。そして、最後の喩えでは「心の倉から良いものを出し」（45節）とまさにこころの問題となります。このように三つの喩えは少しずつ人のこころのあり方に向かっているのが分かります。それで最終的に「人の口は、心からあふれ出ることを語る」（45節）という結論へと至るのでしょう。

わたしは聖書の専門家ではありませんから、イエスさまのたとえ話をうまく理解できませんし、ましてやそれを上手に説明したり、解説したりすることはできません。イエスさまのたとえ話は難しいと思います。本当ならたとえ話というのは難しいことを分かりやすくするときにするものでしょう。ですから、今日の第一朗読の喩えはなんとなく分かった気がします。しかしイエスさまのたとえ話まったく逆で、たとえ話を聞けば聞くほど、たとえ話に触れれば触れるほど、分からなくなります。

ただ、今日の福音朗読に見られますように、たとえ話が独立してあるのではなく、むしろ、イエスさまは何か伝えたいことがあって、そのために一連のたとえ話をひとまとまりとしてお話しなさったんだろうと思います。状況といいたいまいしょうか、イエスさまが誰に向かって、何を伝えたいのかという視点、これを少し難しいことばでいいますと文脈ですが、こういった視点からたとえ話を味わったらよいかと考えます。ですから、この喩えは何を言っているんだろうとあれこれ考えて、答えをひねり出すのも間違っていないでしょうけど、むしろ、たとえ話そのものを受けとる、受けとめるという姿勢が必要に思うのです。

しかも、イエスさまのたとえ話に触れる、わたしたち一人ひとりの人生、生活の場面があるわけです。これも少し難しい言葉で文脈といいます。ある人は哀しみに直面しているときに今日の三つのたとえ話に出会うでしょう。ある人は人間関係に悩んでいるときに、丸太の喩えを耳にするでしょう。ある人は新入学や新生活を前にして期待と不安が入り交じった中で善い木と悪い木の喩えに触れることでしょう。それぞれの人生の尊い一番面、一場面でイエスさまのことばに出会って、感じて、理解して、そしてまた新しい人生を歩み始めるのです。

教会は「教える教会」であり続けたように思います。教会の奉仕者、司教、司祭、助祭、そして奉獻生活者たちは、教えることに熱心でした。ですから、とても豊かな意味が含まれている、そして、人生の場面場面でさらに豊かなメッセージを与えてくれるイエスさまのたとえ話、あるいはイエスさまのおことば自体を「教える」という立場から捉えてしまって、平凡なものにしてしまっているのかもしれない。

イエスさまが語られる福音の場面と状況と、わたしたちが生きるかけがえのないいのちの営み、人生があります。二つの文脈が一つになるように神のみことばである聖書が読まれるべきだと考えます。そこには「教える教会」というおごり高ぶった態度はなくなりますし、「聞く教会」という卑屈な姿勢もなくなっていくのではないのでしょうか。それこそがシノドス的な教会だと思います。

少し、理屈っぽいお話しで申し訳ありませんでした。

それではまた来週。